

文化の仲間

京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間 会報 No.55 2011年1月9日発行
川崎市幸区古市場 2-109 京浜協同劇団内 TEL 044-511-4951 郵便振替 00250-3-18369

文化は人間の尊厳を支える力

より多くの方々に仲間となっていただける年に

二村 柊子

「京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間」は15回目のお正月を迎えました。日頃の皆様のお力添え本当にありがとうございます。

2010年、京浜協同劇団は、稽古場での公演を中心に活動の輪を大きく広げました。私たち“文化の仲間”も夏「絵と音楽と朗読の集い」に劇団とともに取り組むことができ、心はずませました。

予想される厳しい未来。「文化」はそんな状況の中、人間らしさを育み、人間の尊厳を支える大きな力となるはずです。より多くの方々に、この会の仲間となっていただける年でありたいと思っています。

今年も、どうぞよろしく願いいたします。

2011年 (文化の仲間代表世話人)



書：小野寺 晃（文化の仲間世話人・書家）

1100人を超える観劇者で好評

劇団の第81回公演「黒と白のピエタ」

京浜協同劇団の第81回公演「黒と白のピエタ—種^たね子を粉にひいてはならない」は、2010年11月・12



ケーテ・コルヴィッツ
自画像 (1920年)

月に6日間、10ステージで行われました。

これは、ドイツを代表する女性の版画家・彫刻家であるケーテ・コルヴィッツの生き方を描いたもので、劇団員の和田庸子さんが長年あたためてきた企画を脚本化したものです。

多くの協力出演者、スタッフなどの協力もあり、合計1100人を超える方に観劇に来ていただき、大好評のうちに終了しました。

今回この公演にかかわった様々な立場の方々に、感想を寄せていただきました。

ケーテへの道

若杉 民

千穉楽を終えた後、淋しくてせつなくて苦しくて、まるで失恋したような気持ちが私を襲った。「まるで、ケーテとつながっていたへその緒が切り離されるかのよう」であった。約3ヶ月、京浜協同劇団と共に歩み、そんな千穉楽を迎えることとなった日々のことを、少し振り返ってみようと思う。

初めての本読みの日、99%知らない顔の中で声を出す恐怖。そして初対面の方々と会話の中で「プロの人」という言葉をきいた。私は「プロ」……。プロって何だろう。そのことは今回の私のテーマのひとつとなった。

京浜協同劇団は働きながら芝居づくりをしている集団。だから仕事が終わった夜が稽古時間である。私の所属する民藝の稽古時間は昼間。しかし稽古中のギャラは出ないから、皆、朝晩のバイトに励んだり、無収入に泣く泣く耐えるしかない。では、私達はどんな風に芝居づくりに向きあっているのだろう。

役づくりの過程はとにかく苦しい。けれど逃げることはできない。爪を立て、かじりついて、終点のない、完成のない、満足のない、演劇というものにひたすら挑み続けるしかない。そしてある成果を残さなければならぬ。頑張ったけど出来ませんでした、は許されない。それがプロ。——ではないだろうか。そして、今回の仲間達の多くが、そのように立ち向かった。そう……。誰もが心ひとつでプロの仕事に挑むことができる。人間は、苦しみを喜びとすることのできるめずらしい動物だ。



ケーテと夫の医師カール (写真:長坂クニヒロ 以下同)

稽古形態も面白かった。連日の稽古が1ヶ月あまり続くことに慣れていていたが、今回は、3時間あまりの稽古が週3回、3ヶ月。トータルすると、連日1カ月の稽古よりもずっと短かったが、3ヶ月、役を抱えて暮らすことに大きな意味があったように思う。出演者全員、仕事や生活の中で、つまり稽古時間以外のところで芝居を抱えていたはずだ。その抱え方……。結婚し、2歳7ヶ月の息子がいて、他にも仕事もしている私は、とにかく時間が足りなかった。役づくりのために観たいビデオ、読みたい本、行きたい場所、それらの願望はほとんどかなわなかった。ただ、役の卵は常に私の中であって、3ヶ月間あたためられていた。今回の出会いの発端ともなった「かながわ女性九条の会」の司会の仕事や、主宰する日舞の教室の発表会等も重なり、気が狂いそうであったが、それらの時間が、ケーテを育ててくれた。



そして、演出の杉本氏が舵を取る稽古場は、厳しくも優しくも、豊かに、演劇への愛にあふれていた。それは「ミスター・チムニー」からはぐくまれた、杉本氏と京浜協同劇団との歴史あつてのものだと感じ取ることができた。そして、そこにある信念は、私が信じ追いつけているものに違いなかった。全く抵抗なく安心して、私はその歴史の流れに加わった。

果たすべき仕事を見つめ、信頼する仲間達と稽古に励んだ3ヶ月。私達は皆、「プロの仕事」を求められていた。幸せであった。

千穉楽は、その日々とのお別れだった。私の相手が、ケーテ・コルヴィッツという偉大な画家であったことについては、幸か不幸か紙面が足りないので触れない。ただ、感謝している。この素晴らしい出会いに。

絵は残る。ケーテの絵がそうであるように。演劇は

残らない。そう嘆いたとき、「そんなことはない、私の心の中にしっかり残っている。」と言ってくださったお客様の言葉に救われたことがある。それでもやっぱり、もう一度ケーテを演じたい、そんな気持ちのまま愛する故郷となった京浜協同劇団の方々と、今は離れていく。この淋しさは、たぶんとても美しいものである。(劇団民藝 女優)

濃い幸せな時間を過ごした

栗木 健

〇〇さんは、辛口でしたよ！
というのが、この文章を誘っていただいた時に言われた事です。

差し支えがあるので、〇〇さんがどなたかは控えさせていただきますが、うーん、辛口の文章のほうが喜ばれるのかな？笑

申し遅れました、ドラマーの栗木健です。先日の京浜協同劇団第81回公演「黒と白のピエタ～種子を粉にひいてはならない～」で安達元彦さんのピアノと共に打楽器を演奏させていただいた者です。

骨太な作品に参加させて頂いて、濃い幸せな時間を過ごす事ができ、皆様には感謝しています。思えばお芝居の音楽に初めて関わったのが、京浜協同劇団の「コーカサスの白墨の輪」でした。その時の音楽も安達さんでした。その後僕も色々あり、ぐるーっと一回りして再び安達さんからご指名をいただき、すごく嬉しかったです。



(右端が筆者)



ドラマーと名乗ってはいますがこのご時世、ドラムを叩く現場は減る一方です。音量の出る音楽を演奏するとなるとそれなりの設備が必要となり、今は手軽に演奏できるアコースティックな編成が求められています。僕も興味があったのでパーカッションも演奏するのですが、お誘いいただく仕事はパーカッションがほとんどになってきてます。

でも、そのおかげでお芝居の音楽や効果音を生演奏する機会が増え、さらに音楽そのものを作る仕事もさせてもらえるようになりました。その大元のきっかけが「コーカサス…」だった気がします。

ドラマーとして一本筋を通して活躍してる友達もたくさんいますが、今の僕のポジションも悪くないなあ、と思ってます。文化とは、などと崇高な事はわかりませんが、大の大人がたくさんの時間と情念をかけて作り出したお芝居というすぐ消えて無くなってしまいう空間は、何物にも比べようがない貴重で面白い場所だと思ってます。

「黒と白のピエタ…」で使用した楽器を紹介させていただきます。

あの楽器はカクテルドラムといいますが、ちょっと専門的な話しになりますが、上の打面は普通に叩くのですが、足元のペダルを踏むとビーター（大太鼓用のマレット）が下から振り上がり、下の打面を打つ仕組みになってます。僕の楽器はヤマハ製で最近のモノですが、楽器のアイデア自体はジャズ



が生まれた頃からあって資料も残ってます。当時、狭いバーとかで演奏するために誕生した立奏ドラムですね。

今回のあの場面の楽器編成、もしかして当時のドイツのバーで実際にあった風景かもしれませんね。

(パーカッションリスト)

みんなで作る楽しさを理解

——初舞台を終えて

西川 立洋

今から2年前は自分が演劇を始め、舞台に立つとは想像していませんでした。演劇という存在、そのような世界があるということも知らなかったと思います。2年前は自分は学生でネットのホームページで金を稼ぐことを覚え、それにハマっていました。1年前にそのホームページが閉鎖、それと同時に学校も中退、フリーターになりました。自分は駄目男だ、これからどうしようか、未来が見えない、自暴自棄になっていました。ここから這い上がるにはどうしたら良いのだろうかとりあえずネットで駄目男と検索してみました。いろいろと検索を続けた中で、そのきっかけとして選んだのが演劇でした。

演劇を選んだ理由は、1、一芸を身に付けたい。演劇はスポーツと違って長年の努力を必要とするよりはできる人は最初から出来て、出来ない人は何年やっても出来ないそんな才能の世界だろうと考えていました。なので一度やってみようと思いました。それで才能があるようなら役者の道もあるかなと。2、演劇に向いてなくても自己表現の訓練になる。3、老後の趣味。

ネットでこの京浜協同劇団を見つけて入りました。最初劇団とはどんなところなのだろうと戸惑いました



酒場にて (右テーブルの左端が筆者)

が皆良い人達でした。「黒と白のピエタ」という芝居でクラウドという役を頂きました。最初は演技ってのは、簡単に気持ちが入って、パッパッパと出来るものだと思ってました。しかし、いや普通の人はこちらでつまづかないところで自分つまづきました。役のセリフに気持ちが入らず一向に棒読みから抜け出せませんでした。自分は思いました。自分は演劇を始める前、演劇を一度も見たことはなかったけれども、よく人生を振り返ってみると小説も一度も読んだことはないし、テレビドラマや映画もほとんど見たことはありませんでした。特に嫌っているつもりではありませんでしたが好んで興味をもったことがありませんでした。なので向いてないんだなと思いました。それに頑張っても頑張っても出来ないな—と思うことが最近多かったので、演劇も出来ないかもと諦め気味になっていました。



本番が近づいたある日、杉本さんに「100回やれ」と言われました。ただ既に総計すると100回は言ってるし、今更変わらないだろうといつものようにひねくられていました。自分は、優しい劇団員の皆様が自分の練習を手伝ってくれましたが、皆様の善意を無下にしておいて練習もしないで帰宅しました。これは家に帰って自己嫌悪に陥りました。これは出来ないまま本番を迎えるわけにはいかないなと思って、前日早くに来て練習しました。これが功を成し前日に少し良くなり本番も初日のみ少し良くなりました。これは貴重な経験でした。しかしそれ以降は元に戻ってしまいました。まだ掴めてはいないようです。初舞台を終え、まだ役者をやる楽しさはあまり理解出来ませんでした。みんなで芝居を作る楽しさは少し理解しましたが最後に皆様ありがとうございました。

(劇団員・第40期新人)

客席に座る人たち

岡田 京子

「ワル口くちを書いてほしい」と言うことなので、そうしたいと思ったけれど、これは責任が出てくるので案外難しいことなのです。「ワル口」というのは即ち「私は何を望んでいるか」ということを自分に問い直し表明するということになるので…。

『黒と白のピエタ』を見終わって最初に来た思いは「久しぶりに京浜協同劇団を見た」という気持ちでした。じゃあ私は何を「協同劇団らしい」と思っているのだろうか…ということです。

30年近くここを見続けてきた私に対して、最近一緒に行く友人たちはほとんど観客としては新人です。京浜協同劇団らしさも何も分からないはずと思うのですが、なぜかほとんど私と同じ感想を持つようです。

帰りにお茶をしたり夕食のテーブルを囲む時、芝居が「今一つ…」の時は、「アソコが良かったね」「〇〇がきれいだったね」「あの人は上手だったね」というような話が結構出るので、私が「これこそ京浜！」と思う作品の時は、話題は劇団のことではなく、自分たち自身のことになるのがしばしばです。

『黒と白〜』の時も、「いやあーすごくつらかった」「でも元気もらったよ」「つらいけれどシンプルな時代というのがあったんだね」「そう、今の方がずっと複雑で見えにくくなっているよ」「何が正しくて何が悪いのかわからなくなってるね」「子どもを育てながら仕事をしている時を思い出すよ」「女の立場をしっかりと書いてもらってうれしかった」「あんな夫だったらいいね」「あの人（ケーテ）がただのお母ちゃんだけ



ベルリンの医院で



ポスターの依頼を受ける

だったり、絵描きだけだったりでなかったから良かったんだね」「女って良いね」「日本はどうなって行くんだろう」「〇〇さん（画家の友人）に見せたいね。食べていけないから別の仕事をしているみたいだけれど、きっと元気が出るんじゃないかなあ」 etc…

とにかく話は尽きず、そして必ず「また見たい」というのです。

そういえば、これまでだって客席に座るほとんどの人たちが同じだったかもしれない。全く芝居通ではなかったし、一生見なくたって平気な人たちだったかもしれないけれど、この日・この劇場に集まる人たちは、いつも自分の人生を重ね、自分の生き方を通してしか芝居を見なかったと言えるように思います。私はこんな観客に惹かれて京浜通いをしていたのだろうか。こんな人たちに元気を送り元気をもらう劇団であり続けてほしいという思いが「京浜〜らしい」という言い方になっていたのかも知れません。

みんな（観客）が自分を語らないで、「音楽が良かったワー」とか「舞台装置がよかったねー」なんていう時は、その言葉に惑わされないでください。それは「自分とは関係なかったけどー」ということなので、

（文化の仲間会員・作曲家）

侘びしさ転じて糧と成す

石井 彰二

何の因果か、いつまでたっても演劇に馴染めないオレが感想を書くはめになりました。

「黒と白のピエタ」についての情報源はこの会報、同封されたチラシや劇団ニュースだけ。正直ケーテ・



コルヴィッツのコの字も知らなかったのですが、おかげで事前に少なくとも和田庸子さんが主人公ケーテを深く敬愛し、その存在をととても大切にしていることだけは知ることができました。そんな程度の、良く言えばニュートラルな心持ちで初日の夜の部に臨んだわけです。

で、いったい何をどう感じたか？ 白状しますが、展開が何だかせわしなくて落ち着かないなァとか、歌が総じて聴き取りにくいなァとか、およそコトの本質とは関係ない上っ面の不満に加えて、結局登場人物の誰にも自分を託すことができず、これといった高揚感もないまま終わっちゃったという、侘びしい気分で帰路についたのです。こうしたネガティブな言辞はバツかもしれませんが、正直な気持ちなのでしかたありません。

しかし、いくらなんでもこれだけじゃサマになりません。あらためてプログラムを精読、然る後に禁じ手

のネット検索！ 主人公ケーテの生涯や画業を論じた評伝3冊を取り寄せて、目下ツケヤキバの読書三昧中。ついでに翌々日放送された、同じドイツ人で彼女の息子たちと同世代だった劇作家ブレヒトが登場するドキュメンタリーも録画しちゃったりして、19世紀から20世紀にかけてのドイツの状況やブレヒトの演劇論なんかもつまみ食い。

まさに今、アタマの中で耳新しい言葉やイメージが暴れ回ってる真っ最中なのです。

才能は同時に使命、織工、農民戦争、悲惨の凶、リープクネヒト追悼像、ピエタ、種を粉に挽いてはならない、屈指の素描家、モノクローム媒体、表現主義、象徴形式、徹底したリアリズム、生命を産み出すものの立場から戦争を告発したただ一人の画家、主題は一貫して社会的弱者＝女と子供……等々。

とりわけ強烈なのが若桑みどり氏の同時代人ローザ・ルクセンブルグとケーテの比較論。曰く、かたや革命家、かたや革命に絶望した芸術家。「醜かった」ルクセンブルグと「美しい娘ではなかった」ケーテ、云々。

それにしても思うのです。「なんで芸術家なんだ」と。今回、表現者の生涯をもって表現されたものは何かと。芸術家という生き方に対する妬ましさや縁遠さも手伝って、いっそ、その美しさに彼女が魅せられ、生涯描きつづけた名も無く貧しい人々、辱められ虐げられながらも、新たな命を生み育てる強靱な女たちをこそ主人公にして欲しかった、と。

あれから一週間、なんだかんだ反発しながら、気がつけば件のお芝居にしっかり触発されて、久々に読書にいそしみ、こんな具合にあれこれと思い悩んでいる自分がいます。

スタッフ、出演者、客席を埋めたみなさん、ありがとう！

2年間の艱難辛苦を耐えぬいて新境地を拓いた庸子さん、おつかれさま！ 一寸した思いつきだったのでしようが、投稿の機会を下さった二村代表にも感謝します。

(文化の仲間会員)



カーテンコール

今も、その歴史が息づいている

「枳形城・落日の舞い」稽古が始まった

川崎郷土・市民劇・第三弾

制作担当 関 昭三 (川崎市民劇場)

2006年に始まった、市民公募とプロとのコラボ、行政との協同で作る「川崎郷土・市民劇」が、第3回目の事業として、来年5月に向け、小川信夫作、ふじたあさや上演台本・演出による「枳形城・落日の舞い」の稽古が開始された。

「川崎郷土・市民劇」第1回には、川崎宿を復興させ、「民間省要」づくり幕府に進言した田中兵庫を描いた「多摩川に虹かけた男」、第2回は2008年、川崎の海を埋め立て、池上新田を開拓した池上幸豊を取り上げた「池上幸豊とその妻」の上演となって、いずれも3300名を超える市民の皆さんに観劇頂き好評を博した。いずれも江戸中期の川崎にあって庶民の為に知力と財力を傾けた川崎の偉人でした。作者は青少年劇作家の小川信夫氏であり、舞台創造の中核をなしたのは京浜協同劇団でした。

“今回は川崎北部地域を題材に”という要望のもとに、小川信夫氏が書き上げた力作「枳形城・落日の舞い」は、川崎市多摩区の枳形山公園に残る城跡「枳形城」にまつわる領主「稲毛三郎重成」を描いた作品です。

鎌倉時代、頼朝の重臣として活躍した武将・稲毛三郎重成(いなげさぶろうしげなり)はもともと平家側にいた武将だったが、途中で従兄弟同士になる秩父の畠山重忠とともに頼朝側につく。その後、源平合戦や

奥州平泉の藤原氏との戦いに幾多の功績を挙げ、稲毛庄(現在の中原、高津、多摩、稲城市一部の広大な地域)を頼朝より拝受。また、妻は北条時政の娘、つまり政子の妹を頼朝公より授けられたといわれている。畠山の妻も同じ政子の妹だった。

ドラマは、重成と妻綾子、そして稲毛と畠山との従兄弟同士の愛と嫉妬、権力の非情さ、不信などから滅びて行く権力者たちの落日を描きます。

今も、綾子の命日である9月に菅の「薬師堂」で奉納される「菅の獅子舞」、そして、綾子が鎌倉から嫁入りの折りに唄われたといわれる祝い唄「これさま」、持参した「種」が、今も多摩地区の特産野菜といわれている「のらぼう」など、舞台は、重成夫婦が民百姓を思う「民への仁の心」に繋がるエピソードを交えながら、8世紀を経ても民衆によって引き継がれ守られてきたわけが明らかにされていきます。

今回の特徴のひとつに、市民公募に応募した40名を超える皆さんの中に、演劇経験者、現役の俳優さんもいて、郷土の市民劇づくりに大きな関心を示したことがあります。

稽古は、11月末から始まり、新年1月7日から京浜協同劇団の稽古場をお借りして本格的な稽古が開始されていきます。

上演実行委員長には、多摩区観光推進協議会の会長・原島弘氏があたり、「1人でも多くの方々に観劇してもらい多摩区活性化につながる事業としたい」と熱が入っています。

京浜協同劇団でも、観劇券を取り扱っています。

好評の田中兵庫、池上幸豊に続いて贈る、川崎郷土・市民劇 第3弾

ます がた じょう
枳形城

らくじつのまい
落日の舞い

作 小川信夫 上演台本・演出 ふじたあさや 制作 関昭三

日程 2011年5月6日(金) 18:30 / 7日(土) 14:00 / 8日(日) 14:00 多摩市民館
5月20日(金) 18:30 / 21日(土) 14:00 川崎市教育文化会館

入場料 大人 2500円(当日3000円) 学生以下 1000円

前売券取扱所 川崎市民劇場(川崎 044-244-7481 溝口 044-855-5916) / 川崎市文化財団(044-222-8821) / アートセンター(044-955-0107) / プラザ・ソル(044-874-8501) / ぐらす・かわさき(044-922-4917) / 京浜協同劇団(044-511-4951)

主催 川崎郷土・市民劇上演実行委員会(044-201-1413) (財)川崎市文化財団

共催 川崎市 川崎市教育委員会

◎文化の仲間通信◎

◆川崎市民劇場第300回例会 劇団民藝公演

林の中のナポリ

作 山田太一／演出 丹野郁弓／出演 檜山文枝・日色ともゑ・伊藤孝雄 ほか

日程 2月3日～8日

会場 多摩・宮前・幸の各市民館とエポック中原
川崎市民劇場第300回記念公演。

舞台はペンション。オーナー夫婦とその娘。舞い込んできた老婦人。自分自身を見つめようとする人たちが、人生を選択し、再生する。

一人ひとりが踏み出していく、切ないような哀しいような雄々しさとたくましさと底力がここにある。

◎第300回例会記念講演会 1月16日14:00

エポック中原大会議室 講師 山田太一

申込み制：サークルごとにまとめて申込みが必要

問合せ 川崎事務所 044-244-7481

溝の口事務所 044-855-5916

◆浅草・東洋館寄席

腹話術師 しろたにまもる 出演予定

日程 1月13日(木)・14日(金)／2月16日(水)・17日(金)／3月14日(月)・17日(木)

入場料 2500円のところ、割引券(1000円)があります。ご希望の方は、城谷さん(044-544-3737)までお知らせください。

◆腹話術の会★きずな 発表会

日程 3月6日(日)13:30

会場 総合自治会館ホール(武蔵小杉)

入場料 無料

しろたにまもるさんほか、30数名が出演する楽しい腹話術のフェスティバルです。

◆総文連 市民芸術祭

舞台部門

日程 3月13日(日)

会場 中原市民館ホール(武蔵小杉下車)

展示部門

日程 3月16日(木)～20日(日)

会場 市民ギャラリー(JR川崎駅下車)

川崎市総合文化団体連絡会(総文連)主催の、川崎市内で活動する文化団体が行う、市民芸術祭です。

◆シェープキン演劇大学(モスクワ)ワークショップ

日程 5月28日成田発～6月20日成田着

場所 シェープキン演劇大学(モスクワ)

費用 52万円前後(旅費・宿泊費含む、食費含まず)

応募締切 3月10日

講師 ユーリ・ソローミン、ウラジーミル・ベイリス、ボリス・リュビーモフ ほか

講義内容 演技実習、ヴォイス・トレーニング、ムーブメント、ダンス

申込み・問合せ 劇団俳小 03-3987-1787

◆川崎市民劇場第301回例会 劇団文化座公演

てくれっつのは

原作 蜂谷涼／脚本 瀬戸口郁／演出 西川信廣／出演 佐々木愛・有賀ひろみ・阿部敦子 ほか

日程 4月11日～16日

会場 多摩・宮前・幸の各市民館とエポック中原

いわくありげな3人の女。彼女たちはなぜ結びつき、北の果ての小樽に着いたのか?……

◆日本フィルハーモニー交響楽団 横浜定期会員募集 春季2011年3月～7月(各月1回土曜日18:00開演)

会場 横浜みなとみらいホール(大ホール)

料金(全5回) S席22000円、A席19000円 ほか

3月5日 指揮 大友直人／チェロ 菊池知也／演目 ヴォーン・ウィリアムズ(交響曲第2番《ロンドン交響曲》)・エルガー(チェロ協奏曲ホ短調) ほか

4月16日 指揮 ピエタリ・インキネン／ピアノ 小菅優／演目 ドビュッシー(牧神の午後への前奏曲)・ラヴェル(ピアノ協奏曲ト長調) ほか

5月14日 指揮 ペリー・ソー／ピアノ 横山幸雄／演目 ウェーバー(オペラ《魔弾の射手》序曲)・モーツァルト(ピアノ協奏曲24番) ほか

6月11日 指揮 アレクサンドル・ラザレフ／ヴァイオリン 堀米ゆず子／演目 ブラームス(ヴァイオリン協奏曲)・R. シュトラウス(ツアラトゥストラはかく語りき) ほか

7月2日 指揮 広上淳一／ソプラノ 谷村由美子／演目 ドビュッシー(小組曲)・カントループ(《オーヴェルニュの歌》より)・ホルスト(組曲《惑星》)

問合せ 日本フィル・サービスセンター

電話 03-5378-5911 FAX 03-5378-6161

●「文化の仲間ギャラリー」は前回まで竹間テル子さんに絵手紙を10回お寄せいただきました。今回から、文化の仲間の世話人で書家の小野寺晃さんの書を掲載します。

■文化の仲間ギャラリー■

小野寺 晃①

